

愛あい～子どもの居場所～／A地域



〔経 過〕

地域で「子どもが集まる場」の必要性についての課題が挙がり、その活動のコアメンバーとなる民生委員やボランティア登録者が集まり、子どもの居場所について検討を開始した。その結果、愛宕公民館を会場とした子どもの居場所づくりが開始となり、現在は、まちづくり推進協議会の事業として実施している。

〔メンバー〕

○愛あい（子どもの居場所づくり）事業実行委員会

- ・豊岡地区地域住民(民生委員、地域ボランティア、地域コーディネーター)
- ・東部まちづくりセンター
- ・地域まるごと支援員

〔目 的〕

- ・放課後に子どもたちが気軽に通える居場所づくり
- ・子どもと地域の大人たちとの交流を図る

〔内 容〕

スラックラインや吹き矢などの軽スポーツ、季節の素材を生かした創作活動、段ボール基地、紙コップツリーなどの創作活動、大道芸人のショーのなど、多岐にわたる遊びを大人の見守りのもと実施している。

実績

(事業・活動の実績)

○良かった点

- ・子どもたちと豊岡地区の地域住民との交流が促進された。
- ・子どもの居場所だけでなく、大人も参加できる場となっている。
- ・月2回継続して開催できていることにより、地域に根差し地域全体で子どもを育てていくという風土が定着しつつある。
- ・ボランティアの参加の場となっている。特に学生や20代の若いボランティアが活動できる場所となっており、若い方に地域住民が行っている活動を知ってもらう機会にもなっている。

○難しかった点・今後の課題

- ・学生ボランティアは、活動時期が限られていたり、単発の参加で終了することが多く、継続した活動につながりにくい。継続的に担い手となり得る可能性の高い世代への周知も必要。
- ・現在は愛宕公民館での開催となっているため、参加は愛宕東小の児童が中心となっている。豊岡地区全体として考えると、愛宕公民館以外での開催を検討することも必要。

総括

現在は、実施内容の協議や開催に伴う準備など地域住民が主体となり運営している。本事例は地域課題やニーズをキャッチし、検討、実施、地域住民主体の取組への移行といったステップがスムーズに行えている活動であり、このスキームは地域で行われる他の活動にも生かしていきたい。また、担い手の循環を進めるために、若い世代が参入しやすい活動に向けての協議が必要。

就労体験・ボランティアを通して地域と繋がる／B地域



[経 過]

相談者は10年間実家で引きこもっていたが、父からの相談がきっかけで地域まるごと支援員が介入し、一人暮らしを始めた。就職に向けて、旭川西ロータリークラブの協力で地域の企業で就労体験を始め、雇用には至らなかったが、後に自動車免許取得の援助をしていただくことに繋がった。

その後は、就職活動や金銭管理がうまくいかないことで自分に自信が持てず自暴自棄になってしまう様子も見られたが、ボランティア活動やすずかけのフリースペースに通い始め、他者との交流が増えたことがきっかけで少しずつ前向きな様子が見られるようになった。

[メンバー]

- ・旭川西ロータリークラブ
- ・ハローワーク就労支援員
- ・保護課ケースワーカー
- ・地域まるごと支援員
- ・神楽・西神楽地域包括支援センター

[内 容]

目の病気により家庭菜園・無人販売所を続けることが難しくなった高齢者のボランティアを開始し、その後も様々なボランティア活動を行っている。

実績

（事業・活動の実績）

○良かった点

- ・ 相談者は就労体験やボランティア活動を通して社会に参加し、地域や人との繋がりを再構築することができた。また、支えられる側から支える側になったことで人から感謝され、自己肯定感の充足や自信に繋がった。
- ・ ボランティア依頼者は楽しみである家庭菜園を続けることができるとともに、他者との交流の機会を持つことができた。

○難しかった点

- ・ 就職活動については、社会から長く離れていた相談者には負担が大きかった。本人は「大丈夫」と話していても、実際には精神的ケアや金銭管理の面での支援が必要だった。

総括

- ・ 引きこもりの経験があり、未就労期間が長かったことで孤立し、自己肯定感が低かった相談者であるが、地域や他者との繋がりを通して孤立が解消し、様々なボランティア活動を通して自己肯定感の向上に繋がったと考えられる。
- ・ 現在は就労体験に行った企業からの援助で自動車学校に通っており、免許取得後は就職を目指す予定だが、様々な支援機関や地域との繋がりも継続しながら相談者のペースに合わせて支援していきたい。

孤立世帯が町内会活動の担い手につながるまで／C地域

[ケースおよび支援の概要]

- 対象の世帯は町内会には所属していたが、両親が亡くなったからは町内会活動から遠ざかっており、10年以上は周辺住民との交流も途絶えていた。
- 年末が迫るタイミングで姉が栄養失調により郵便局で倒れて帰宅できない状況、ライフラインは停止寸前で灯油も尽きる間際で両名とも1週間何も食べていないという状況の困窮状態に陥った姉弟世帯に対し、町内会員と協働して『食糧支援』や『見守り・声掛け』などの支援を実施した。

[対応の結果]

- 弟が町内会への恩返しとしてボランティア登録して近隣住民の犬の散歩のボランティアを毎日行うようになった。また、町内会で月1回行われる美化活動に参加し、令和6年度から町内会独自の除雪ボランティア活動にも担い手として参加予定となった。
- 状況を発見して支援した近隣住民とこの姉弟とはその後も定期的な交流（お裾分けなど）が続いている。



2.13犬の散歩ボランティア初回の様子

実績

（事業・活動の実績）

○良かった点

- ・ 病院と町内会、地域まるごと支援員が状況を把握し、連携できたことでスムーズに介入することができた。
- ・ 個別支援の課題解決で終わらせるだけでなく地域支援に結びつけることができたため、個別支援と地域づくり支援の連動性を具体化することができた。
- ・ 町内会員の高齢化が課題となる中、本支援で50代の担い手が増える結果となり町内会の高齢化緩和に寄与した。
- ・ 対象の町内会は独自に行っている除雪事業の担い手減少が深刻であった。本事例により特に除雪事業の担い手が増える結果となり、他の町内会員に対する助け合いの効果としての動機づけにつながった。

○難しかった点

- ・ 緊急事態以外で、町内会員同士の日常的な見守り活動や交流（介入）を促進する要因が見つかっていない。
（稀な例であるため、この例だけでは世帯の孤立対策の推進を一般化して周知することは難しい）

総括

（今後の取組に向けた展望など）

- ・ 重層的支援体制整備事業における伴走支援にて今後の活動状況をモニタリングし、支援の効果を今後も検証する。
- ・ 個別支援と地域づくり支援の連動性を具体化した好事例として各種研修会で紹介し、同様の対応事例や伴走支援におけるモニタリング及び地域づくり支援の重要性について周知する。

ふりーすぺーす・すずかけ／D地域



[目 的]

個別支援対象者等の居場所づくりや社会参加及び外出の機会の確保

[対象者]

- ・ 旭川市社会福祉協議会各事業において支援している個別支援対象者
- ・ 全世代、年齢及び性別を問わない。

[対応者]

地域まるごと支援員 1名以上（常駐） ボランティア 1名

[開催日]

毎週月曜日 13時00分～17時00分

祝祭日など旭川市社会福祉協議会が設ける休日は休止とする。

[内 容]

ひきこもりがちで、社会や学校になじみにくく、居場所がほしい、家から出る機会がないと感じている方が、読書をしたり、ボーっと過ごしたり、音楽を聴いたり、ゴロゴロしたり、誰かとお話したり、思いのままに過ごせる場所として開放

[開催回数（7～9月）]

7月：4回 8月：3回 9月：3回

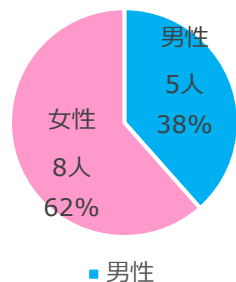
[参加人数（7～9月）]

- ・実人数：13名
- ・延人数：69名

[支援対象者の属性]

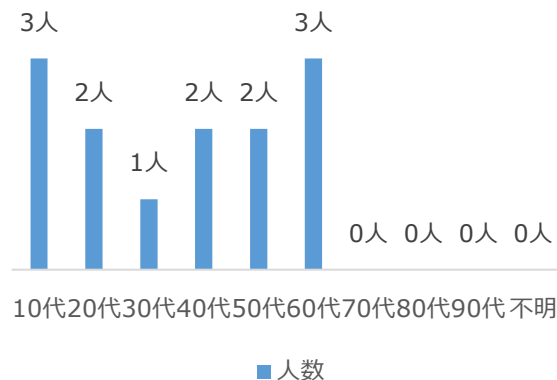
支援対象者の男女比

(n=13)



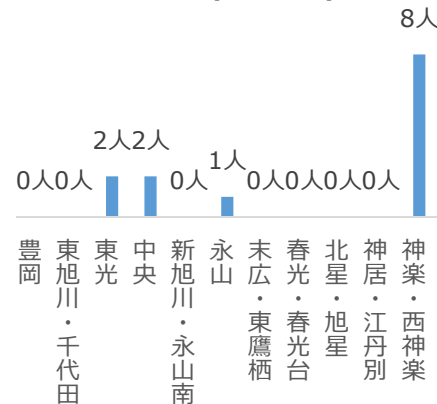
支援対象者年代別内訳

(n=13)



支援対象者居住地域別内訳

(n=13)



支援対象者の様子



参加者と支援者が一緒にモルックを行った。倒れたピンを起こしたり、次はどのピンを倒せばいい等と自然にコミュニケーションをとることができていた。



参加者が支援者にマスコット作りを教えている。
このマスコット作りは、認知症になり手芸が困難になった妻を支えている夫からの依頼で、出来上がったマスコットは笹細工と共に飾られている。



大勢の中だと落ち着かない方は、もう一部屋の方でパソコンやゲームをして過ごしている。



お喋りをしたり、スマホを見たり、時々会話に参加したり、自宅から持ってきた書類を整理したりと思い思いに過ごしている。

実績

(事業・活動の実績)

○良かった点

- ・ふりーすぺーす・すずかけという場所で自然体で関わることができるため、普段の生活、思いに触れることが可能となり、面談では知り得ない部分を発見できる。
- ・定期的に参加者、職員、ボランティアと顔を合わせるうちに、苦手とする人間関係、コミュニケーションの訓練が自然にできている。
- ・参加者同士が気に掛け合う、話を聞く、力になろうとする、ピアサポートの役割が生まれつつある。
- ・本人のペースに合わせ、無理なく、ストレスなく、ゆったりとした中で過ごし、準備や初めての方へのもてなしなど自ら進んで動き、自身の役割を見つけるようになった。

○課題（難しいと感じる点）

- ・主に個別支援対象者が参加し、他の機関の支援対象者の受け入れもしているが、顔なじみの支援者がいないことで、単独での再参加は難しく、地域まるごと支援員が連携し支援することが出来れば、距離感も縮まり、通いやすくなるのではないと思われる。
- ・自力での参加のため、天候、季節によって参加が難しく、交通手段の確保として送迎の支援があると地域にこだわらず受け入れられる。
- ・ふりーすぺーす・すずかけに通うことだけでも、ひきこもり状態だった当事者にすれば、大きな一歩だと思う。自由に、思うままに過ごしているが、さらなる一歩を踏み出すための活動、体験を行うための連携先が必要であるが社会資源が不足している。

総括

- ・家以外に行くところも、行けるところもない。家にいるしかない。と話された当事者の声をどうにかできないかと思い、ふりーすぺーす・すずかけの開設を始めた。
- ・学校、職場、趣味活動、余暇など一般的な生活をしていると、自然と仲間が生まれるのかもしれないが、その生活になじめず、他者と関わることを諦めた人がたくさんいるため、特定の集まりに帰属していなくても、参加できる居場所が必要。
- ・社会に出る自信がない人は、就職活動までに至らない。もっともっと前から、社会参加への取組、支援、協力を考え、本人の力を引き出す手助けになるツールとしてすずかけを活用し、地域の方やボランティア活動の場、ピアサポートの場を経て、すずかけでの体験、経験を踏み台に、社会へ出る準備ができたと思う。他機関と連携し、互いの力を活用してふりーすぺーす・すずかけを継続したい。